新

宮古島市 neo 歴史文化ロード

綾道（あやんつ）

平良北（ひらきた）コース

綾道（あやんつ）

「あやんつ」とは、宮古島（みやこじま）のことばで「趣（おもむき）のある道（みち）」という意味（いみ）です

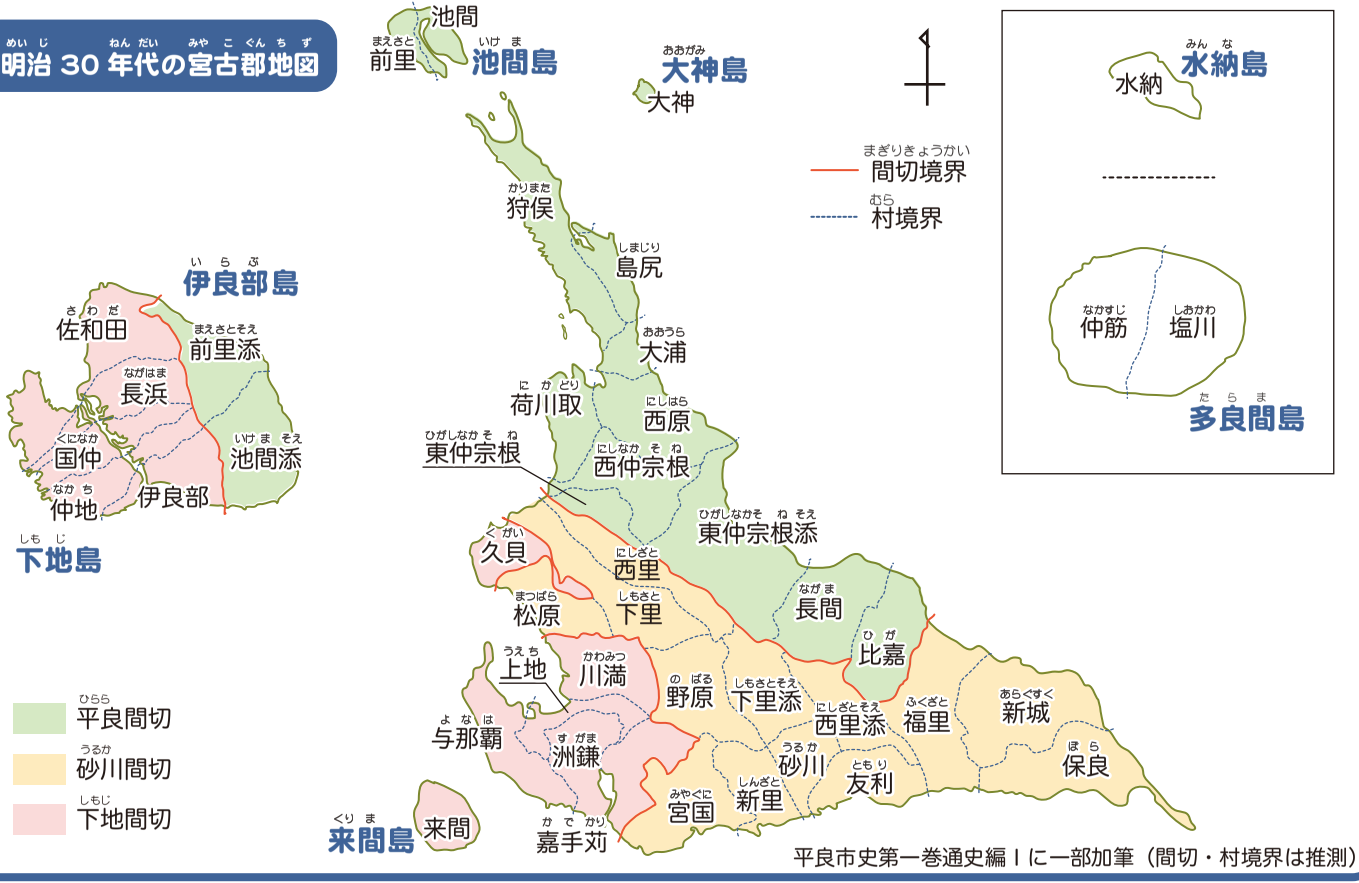
宮古島市の位置と面積

宮古島は大小６つの島（宮古島、池間島、大神島、来間島、伊良部島、下地島）で構成されています。

総面積は204km^2、人口約５万5,000人で、人口の大部分は平良地区に集中しています。

島全体がほぼ平坦で、山岳部や大きな河川もなく、生活用水などのほとんどを地下水に頼っています。

明治30年代の宮古郡地図



平良市史第一巻通史編Ⅰに一部加筆（間切・村境界は推測）

綾道（あやんつ）

平良北コース
約４km（約３時間）

① 住屋御嶽（すみやうたき）
② ドイツ皇帝博愛記念碑（こうていはくあいきねんひ）
③ 貢布座（御用布座）跡（こうふざ　ごようふざあと）
④ 産業界之恩人記念碑（さんぎょうかいのおんじんきねんひ）
⑤ 観音堂経塚（かんのんどうきょうづか）
⑥ 祥雲寺の石垣（しょううんじ　いしがき）
⑦ 漲水石畳道（はりみずいしだたみみち）

⑧ 漲水御嶽（はりみずうたき）と石垣（いしがき）
⑨ 蔵元跡（くらもとあと）
⑩ 豊見親墓（仲宗根豊見親の墓）（とぅゆみゃばか　なかそね）
⑪ 豊見親墓（あとんま墓）
⑫ 豊見親墓（知利真良豊見親の墓）（ちりまら）

⑬ 恩河里之子親雲上の墓碑（おんがーさとぬ　し　ぺーちん　ぼひ）
⑭ 真玉御嶽（まだま）
⑮ 人頭税石（にんとうぜいせき）
⑯ 湧川まさりゃ御嶽（ばくがー）
⑰ ウプムイ御嶽
⑱ カー二里御嶽（ざと）
⑲ 大和井（やまとがー）
⑳ ブトゥラ井（がー）
㉑ 大川（うぶかー）
㉒ 保里御嶽（ふさてぃ）
㉓ 芋ヌ主御嶽（んーぬしゅ）
㉔ 船立堂（ふなだてどう）
㉕ ユーラジ御嶽
㉖ 仲屋金盛ミャーカ（なかやかなもり）
㉗ 外間御嶽（ぷかま）
㉘ 旧仲宗根氏庭園（きゅうなかそ　ね　し　ていえん）
㉙ 仲屋まぶなり御嶽（なかや）
㉚ 尻間御嶽（しりま）
㉛ 住屋遺跡（すみや　いせき）
㉜ 盛加ガー（洞井）（むいか　どうせん）

散策コースは住宅街の中や民家に隣接しています。
お互いが気持ち良く過ごせますよう、ご配慮をお願い致します。

宮古島市 neo 歴史文化ロード

綾道（平良北コース）

もくじ

宮古島市の位置と面積 02

明治 30 年代の宮古郡地図 03

散策 map 04

住屋御嶽 拝所 08

住屋御嶽の伝説 09

ドイツ皇帝博愛記念碑 県指定史跡 10

エドワルド・ヘルンツハイム船長の航海日記 11

貢布座（御用布座）跡 史跡 12

産業界之恩人記念碑 市指定有形文化財（典籍） 13

観音堂経塚 市指定史跡 14

祥雲寺の石垣 市指定史跡 15

祥雲寺の石垣保存修理工事 16

漲水石畳道 市指定史跡 17

漲水御嶽と石垣 市指定史跡 18

宮古島創世神話と人蛇婚説話 19

蔵元跡 史跡 20

蔵元・村番所の構図 21

豊見親墓（仲宗根豊見親の墓） 国指定重要文化財（建造物） 22

ミャーカと横穴式墓地 23

豊見親墓（知利真良豊見親の墓） 国指定重要文化財（建造物） 24

豊見親墓（あとんま墓） 国指定重要文化財（建造物） 25

恩河里之子親雲上の墓碑 市指定有形文化財（典籍） 26

真玉御嶽 拝所 27

真玉御嶽の由来 27

ぶばかり石（人頭税石） 名所 28

人頭税の歴史 29
湧川まさりゃ御嶽 拝所 30
宮古島の竜宮伝説 31
ウプムイ御嶽 拝所 32
カーニ里御嶽 拝所 33
大和井（大和井・ブトゥラ井・大川） 国指定史跡 34
保里御嶽 拝所 36
保里天太と２人の息子 37
ぷち歴史比較年表 37
芋ヌ主御嶽 拝所 38
琉球王国の身分制度 39
船立堂 拝所 40
船立堂の由来 40
ユーラジ御嶽 拝所 41
玉城普門好善の話 41
仲屋金盛ミャーカ 市指定史跡 42
野原岳の変 43
外間御嶽 拝所 44
コネイリ祭 44
旧仲宗根氏庭園 国登録記念物（名勝地関係） 45
仲屋まぶなり御嶽 拝所 46
尻間御嶽 拝所 47
尻間御嶽の由来 47
住屋遺跡 市指定史跡 48
宮古島の英雄系統図 49
盛加ガー（洞井） 市指定史跡 50
「降り井」はどうやってできたの？ 51
文化財の体系図 52
それぞれの文化財の一例 53

住屋御嶽

参道の奥に２つの祠と二つのイビ（香炉）が配置されており、左側の祠が本来のもので、「根入りや下りあらうふむ真主①」が祀られています。右側の祠とイビは、この御嶽から15mほど南東の「ニィーマムトウ②」が移転したものです。祠の中には御神体として自然石が置かれています。また、左側にあるイビは、「フナイウプツカサ③」という御嶽を遥拝（遠くから参拝すること）しています。住屋御嶽は現在、「根間の里御嶽」として、また学問の神様として参拝されています。

住屋御嶽の伝説

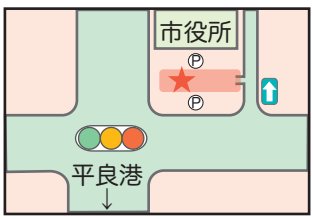
昔、根間というところに７才の男の子がいました。母親が早くに亡くなったので、継母が育てていましたが、この継母がとても心根の悪い人で、この子がいなくなればいいと思っていました。

ある日、赤豆を煮ていると、男の子がそれを食べたいと欲しがるので、継母は「ビュウガッサ（クワズイモ）の葉で包んであげるから、住屋のアブ（洞窟）のそばに生えているのを取っておいで」と言いました。男の子は喜んで取りに行きますが、足を滑らせてアブに落ちてしまいます。運良く途中に生えていた蔓に引っかかり、助けを求めて七日七晩泣き通しました。その泣き声は父親にも聞こえていましたが、なんと父親も大変心根の悪い人で、男の子の泣き声がうるさいと、蔓を切ってしまい、男の子は奈落の底へ落ちてしまいました。

そのアブの底は、「根入りやあろうの国」という、死んだ人がいく国でした。男の子から事情を聞いた根入りやの神様は、男の子の行動を見て、とても心の正しい子だと分かり、元の世界へ帰してやりました。

元の世界へ戻った男の子は、住屋山へ行き、人々から「根入りや下りあらう踏む真主」と呼ばれる神様になったと伝えられています。また、この言い伝えから、この神様は父の行いをとても悲しみ、全ての男を呪うようになったので、男が参拝してはならないと云われています。そのため、祭祀のお供え物は男子には与えないと云われています。

クワズイモ：サトイモに似ているが食べられない。白い汁はかぶれることもあるので注意。



県指定史跡　1956（昭和31）年2月22日指定

ドイツ皇帝博愛記念碑

1873（明治６）年、台風に遭遇して宮古島の南海岸に座礁難破したドイツの商船ロベルトソン号を、宮古島の人々が手厚く介抱し、船を与えて帰国させました。このことを知ったドイツ皇帝ウイルヘルムⅠ世は宮古島の人々の勇気と博愛の精神を讃え、1876（明治９）年、軍艦チクローブ号を宮古島に派遣して記念碑を建立させました。1936（昭和11）年には、建碑60周年記念式典が催され、宮国のンナト浜に「独逸商船遭難之地」と記された石碑が建立されました。

エドワルド・ヘルンツハイム船長の航海日記

タイピンサン（宮古島）の人々の行動は勇気と博愛の精神に満ちていた。私は感謝と敬愛の念を込めて37日間に及ぶタイピンサンでのできごとを語りたい。

この島には博愛の人々がいる。

1873年７月９日

台風に遭遇した。懸命の避難作業を行ったが、行方不明者２名、私を含めた大半の乗員が怪我をした。船もマストと舵を失い、漂流を余儀なくされている。

７月12日

丸一日漂流し、昨日座礁した。救命ボートで脱出を図るが挫折。絶望の夜、私は灯りと人影を見た。朝になり、潮の満ちるのを待って島人のカヌーが近づいて来た。浜には医師も待機し、手厚く保護された。私たちは助かった。

７月21日

10日が経った。親切な対応に心も落ち着き、怪我も徐々に良くなっている。言葉も少しは通じるようになった。暇に任せて机とイスを作った。島人は床で食事をするが、私たちは座って食べたい。

７月24日

舟の捜索も終わり、幾つかの積み荷が残ったが、ほとんどが役に立たない。森で山鳩を見つけた。鉄砲を修理して猟に出る。お目付役の島人は迷惑そうだったが、黙認してくれる。６羽しとめた。素晴らしい夕食が待っている。

８月２日

３人の役人が来て、もうすぐ大きな船が来る。その船に乗って沖縄本島に行くか、私たちが操船して中国に向かうか、決めて欲しいと。私たちは中国に向かうことにした。早速操船練習を始める。

８月10日

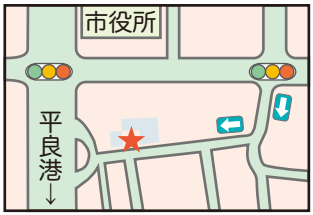
数日前、私は落馬で怪我をした。一日も早く出航したいが、怪我が治らないと許可が下りない。これも島人の親切心なのだろう。彼らと海岸に出かけ、記念に大きなヤシの木に名前を刻んだ。

８月17日

いよいよ出航の日が来た。船は私たちの注文に応じて改造された。昨夜遅くまで別れを惜しんだ人々が手を振る中、大海へ乗り出す。さようなら、タイピンサン。さようなら、博愛の人々。

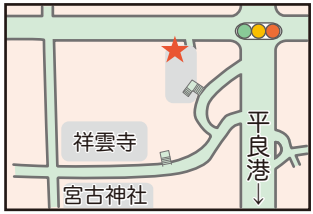
1876年７月22日

帰国後、この事件をドイツ帝国に報告した。島人の勇気ある行動、気高く私心なき博愛の精神が永遠に語り継がれることを、私は望んでいる。



貢布座（御用布座）跡

祥雲寺裏に隣接するこの場所には、近世から近代前期まで上納布に関する業務を執り行っていた蔵元配下の貢布座（御用布座）がありました。近世時代、琉球王府は宮古島から粟と反布を税として徴収していました。各村で織られた反布は、織り終わると村番所に保管し、蔵元に納入しました。

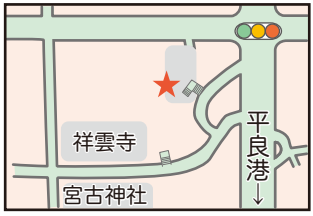


産業界之恩人記念碑

1925（大正14）年7月に宮古神社が西里1番地に創設された際、同境内に建てられました。

表には「産業界之恩人・下地親雲上恵根、砂川親雲上旨屋、稲石刀自・記念碑」の文字が記され、三者を産業界の恩人として讃えています。

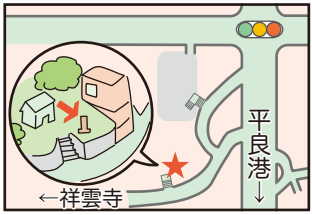
下地親雲上恵根は、1655（順治12）年に、松の苗数本を持ち帰って試植し、1681（康熙20）年には2,000本の松の苗を植え、造林のきっかけを作りました。砂川親雲上旨屋は1597（万暦25）年に中国から芋かづらを持ち帰り、栽培普及に努めました。稲石は1583（万暦11）年、綾錆布を作り出して琉球国王に献上しました。これが宮古上布の元になりました。



観音堂経塚

1699 年に建てられた観音堂は、税を納める船の往来の安全祈願所として崇敬を集めたと伝えられます。観音堂の前庭にある経塚は、宮古島に仏教が伝わったことを示す数少ない遺跡の一つで、表に「経呪嶺」、裏に「雍正丙辰冬白川氏恵道建焉」と記されています。

経塚とは、経典や経文を書き写したものを、塔の中または下に埋めた塚や碑をさします。この経塚の下には「金剛経」の経文を墨で書いた小石が埋められているといわれています。経塚が建てられた雍正丙辰は、1731（雍正 14）年で、白川氏恵道は 1731（雍正９）年から 1737（乾隆２）年まで平良の頭職をつとめており、この経塚は恵道が在任中に建立したものです。



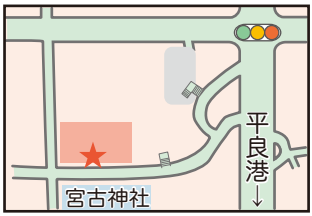
市指定史跡　1975（昭和50）年12月11日指定

祥雲寺の石垣

祥雲寺は薩摩藩が王府に申し立てたことで、1611年に山月和尚によって開山（仏寺を初めて開くこと）されました。

1743年～45年に琉球王国の正史として編纂された史書『球陽』には、1696年の大地震の際、寺の石垣が崩れたことを記しており、この頃にはすでに祥雲寺の石垣があったことを示しています。18世紀初頭、宮古島では全域にわたって大規模な土木工事が進められており、祥雲寺の石垣もこの時、改めて築かれたと考えられます。

戦災や都市計画などで街なみが大きく変わり、石垣が消滅しつつある今、当時の石造文化を知る上からも、重要な建造物です。



祥雲寺の石垣保存修理工事

祥雲寺の石垣は、過去に大型車両が追突して崩れたことがあり、また石垣の内部に根をはった樹木が原因で、石が抜け落ちたり、外側にふくらんでいました。そのため、平成25年度の宮古島市neo歴史文化ロード整備事業で、この石垣を復元する石造文化財保存修理工事を実施しました。

①現況測量（三次元写真計測）

工事前に一般の現地測量に加え、写真計測を行う。

②番号付け

一番下の基礎になる石（根石）が歪んでいると再び崩落を起こすため、石積みを一度全て解体する。その後、再び石を元の位置に正確に戻すため、大小全ての石に番号を貼り付けていく。

③解体

解体しながら石垣の中に詰められた石（裏込）などの材質の記録や、石垣が崩れた原因調査などを行う。

④修復

解体時の記録や測量をもとに積み直す。なるべく元の石材を再利用するが、欠損している箇所は同じ材質の石（祥雲寺は琉球石灰岩）で補填する。

⑤修理後測量（三次元写真計測）

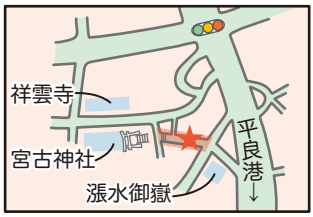
修理完了後、再度写真計測を行い、修理の前後を記録する。修理によって動いた石や補填した石など確認することができ、次回の修理を行う際の基礎資料になる。

修理前

修理後

漲水石畳道

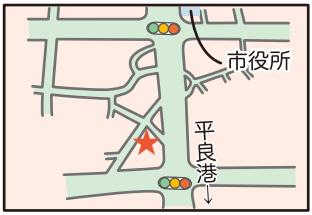
18世紀初め、宮古島の治山・土木工事が精力的に進められていた頃、各村の道路幅は２間半（4.5m）に拡張、改修、新設されたと伝えられています。1696（元禄９）年の大地震後、石畳道も２間半に拡張され、治山事業で豊富に得られた石を敷きつめたものと考えられています。廃藩置県後もほぼ完全に残っていましたが、1921（大正 10）年の漲水港築港、1942（昭和 17）年の宮古神社移転にともなう工事、第二次世界大戦、戦後の道路拡張工事などで損傷し、現在は約３分の１を残すのみとなっています。



市指定史跡　1974（昭和49）年8月29日指定

漲水御嶽と石垣

漲水御嶽は「ツカサヤー」とも呼ばれ、宮古島創世神話や人蛇婚説話などにいろどられており、古代の宮古島の人々の源流をさぐる上からも貴重な御嶽です。南側の石垣は、1500年、仲宗根豊見親が中山王府の先導で八重山のオヤケ赤蜂征討に向かう際、勝利したら神域を整備、奉納すると約束し、見事勝利できたために築かれました。当時の石造技術を知る上でも貴重な石垣です。



宮古島創世神話

まだ島の形がなかった太古の昔、弥久美神が天帝から授かった天岩戸の柱の端を大海原に投げ入れてできたのが宮古島でした。天帝は次に赤土を下ろし、古意角神に「下界に降りて人の世を創り、守護神となれ」と命じ、玉のように輝く女神の姑依玉と共に行くことを認めました。古意角・姑依玉の両神は、多くの神々を連れて地上に降り、漲水御嶽の東側にあった漲水天久崎という岬に居を構え、様々なものを生み出し、神の心を映し出した楽しい人の世を創りました。その頃、島は赤土ばかりだったため、天帝は次に黒土を下ろし、こうして作物がよく実るようになりました。そして二人の間に宗達・嘉玉の男児と女児が生まれ、二人が大きくなった頃、天帝は紅葉を身にまとった木装神という男神、青草を身にまとった草装神という女神を下ろしました。そしてそれぞれ宗達・嘉玉と夫婦となり、東・西に住み、これが現在の東仲宗根・西仲宗根だと云われています。宗達夫婦は世直真主という男児を、嘉玉夫婦は素意麻娘司という女児を産み、後にこの二神が夫婦となり、子孫繁栄し、宮古島民の祖となったといわれています。

人蛇婚説話

昔、平良の住屋の里に、身分も高く富に栄えた夫婦がいました。子がいなかったので神仏に祈ったところ、娘を授かりました。その娘が 14、5 才の頃に妊娠したので、驚いた両親が尋ねると、「誰か分からない白く清らかな若者が毎晩忍び入ってきて、夢心地で夜を重ねるうちにこの体になった」と言うので、両親は不審に思い、糸の先に針をつけて男の髪に刺すように言い、娘はそのとおりにしました。夜明け、糸を手繰って行くと、漲水御嶽の洞の中に首に針を刺された大蛇がいました。両親は驚き悲しみましたが、その夜、娘の夢にその若者が現れ、「私はこの島を創った神、恋角の化身である。島を守る神を創ろうと、あなたに思いを寄せた。必ず３人の子を生む。３才になったら漲水へ連れてくるように」と語りました。その夢の通り、３人の娘が生まれ、３才のときに言われた通り連れて行くと、御嶽の中から恐ろしい形相の大蛇が出てきました。母は驚き逃げようとしましたが、娘たちは大蛇に飛びつき、一人は首に、一人は腰に、一人は尾に抱きつき、御嶽の中へ消えていきました。その夜、大蛇は光を放って天に昇り、娘たちは島の守護神になりました。

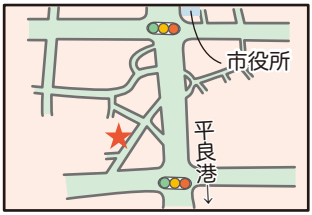
蔵元跡

蔵元は完全に消失し、民家に位置をとどめるまででしかない。

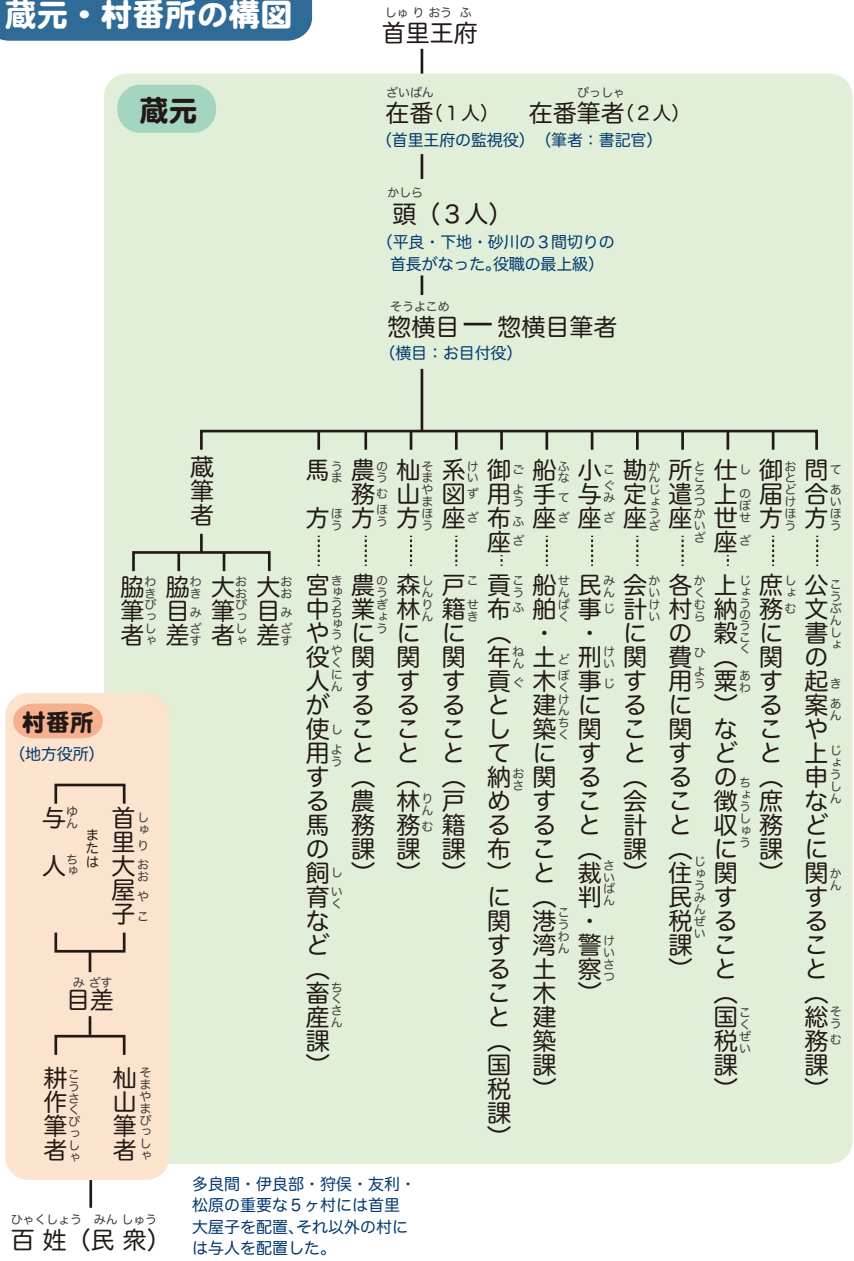
①在番西仮屋跡　④学校所跡
②在番仮屋跡　⑤詰医者仮屋跡
③在番東仮屋跡　※仮屋：在番の宿舎

みやこの歴史 宮古島市史 第一巻 通史編より

16世紀初期に仲宗根豊見親が開設した蔵元は、当時の行政庁にあたります。主に首里王府に納める年貢を取り扱っていました。当初は茅葺きでしたが、1682(康熙21)年に火事で焼失しました。1685年に瓦葺きに建て替えられ、行政機能も拡充整備されていきました。1868(同治６)年に改築され、堅牢な石垣廊と楼門に囲われた広壮な庁舎となりました。1902(明治35年)に宮古島庁と改称され、元在番東仮屋を改築し、移転しました。その後、建物は1921(大正10)年に火事で焼失し、石垣なども漲水港の埋め立て工事に使われ、蔵元の痕跡は完全に消失しました。



蔵元・村番所の構図



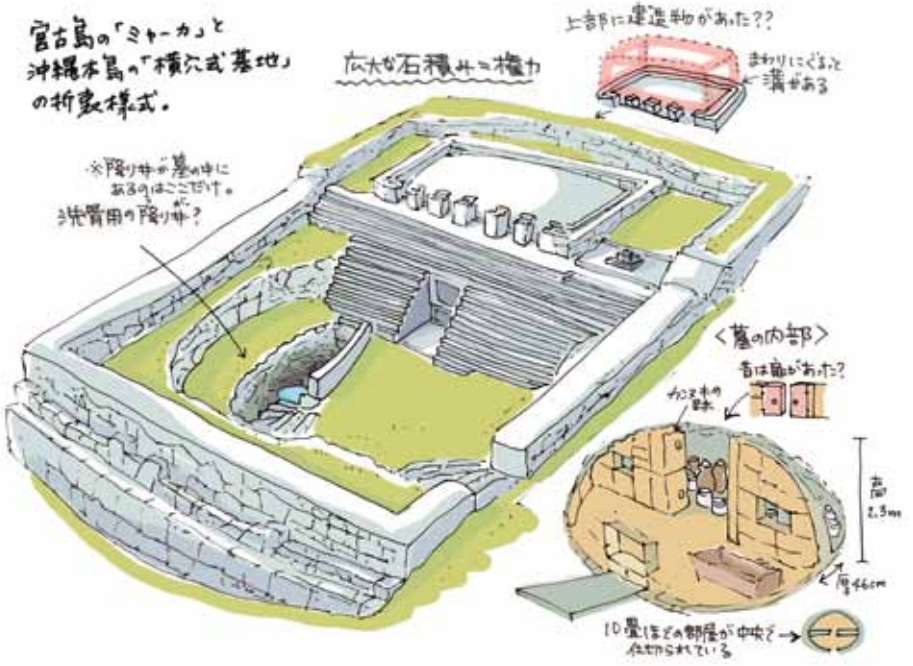
1897（明治30）年に3間切制の廃止により、蔵元は役目を終えた。

宮古島市史 第一巻 通史編より

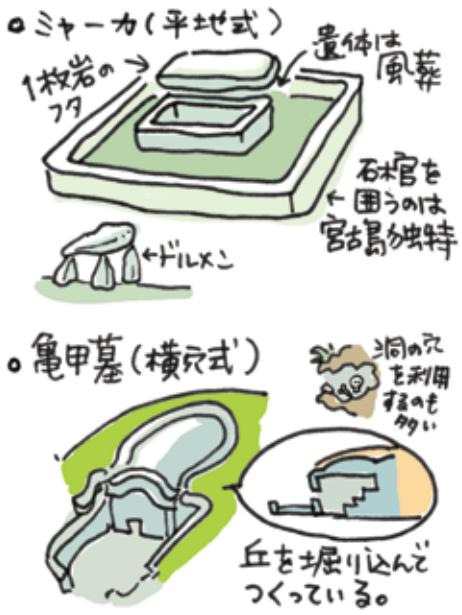
国指定重要有形文化財（建造物）　1993（平成5）年4月20日指定

豊見親墓（仲宗根豊見親の墓）

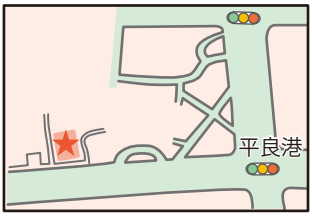
15世紀末から16世紀初頭にかけて宮古島の支配者として君臨した仲宗根豊見親が、父、真誉の子豊見親の霊を弔うために築造したと伝えられています。宮古島在来の“ミャーカ”と、沖縄本島の横穴式墓地の折衷様式で、沖縄本島と宮古島の文化の交流を裏づける代表的な墳墓です。墓は墓室の四方を石垣で囲って西側に出入り口を設け、庭の北隅には小さな降り井を設けてあります。また、墓室の前面には13段の階段が施され、墓室の上部四方には大きな石柱が立てられています。



ミャーカと横穴式墓地

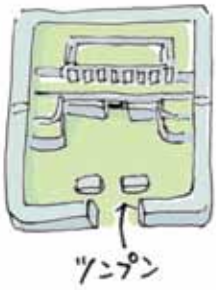


ミャーカは宮古島に古くからある風葬墓地です。巨大な石で囲い、天井も大きな石で蓋をします。西欧地中海沿岸に残っているドルメンの一種としても紹介されます。横穴式墓地は、自然の洞窟や岸壁などを掘り込んだ墓をさし、沖縄本島によく見られる亀甲墓が代表的です。



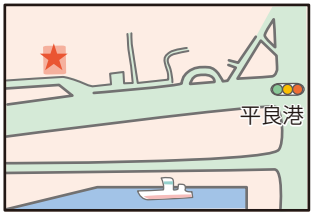
豊見親墓（知利真良豊見親の墓）

ツンプン（ヒンプン）
門の内側の仕切り屏。外からの目かくしや、魔除けの意味をもつ。



この墓は1750年頃、平良の頭、宮金氏寛富が築造したと伝えられています。仲宗根豊見親の墓とともに“みゃーか”から横穴式にうつる折衷様式を示す代表的な墓です。また、ツンプンの跡を残しており、俗に“ツンプン墓”とも呼ばれています。

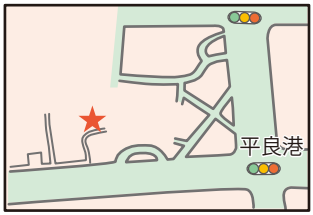
宮金氏寛富は1745～1762年まで平良の頭職を務め、杣山惣主取として大野山林の造林をはかるとともに、瓦の製造を始めたとも伝えられています。知利真良豊見親は、仲宗根豊見親の三男で宮金氏の元祖です。1500年、父と八重山のオヤケ赤蜂征討軍に加わり、その後、次兄祭金豊見親が4年在勤したあとを受けて八重山の頭職となり、かの地で没したと伝えられています。



豊見親墓（あとんま墓）

忠導氏にゆかりのある墓で、同氏族のあとんま（後妻）だけを葬ったことから、俗に“あとんま墓”と呼ばれています。

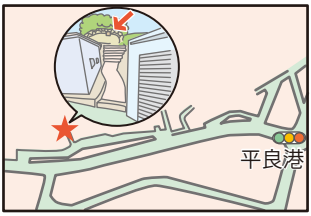
墓は岩盤を掘り込み、切石と組み合わせた墓で、いつ建造されたかは明らかになっていません。忠導氏は16世紀初頭に宮古島の支配者として君臨した仲宗根豊見親を元祖に数多くの頭職を出し、勢力を誇った系統です。その勢力・財力を背景に宮古島の風習として本妻と同じ墓に葬ることのできなかったあとんまの墓を設け、その霊を弔ったものと思われます。



恩河里之子親雲上の墓碑

「支流長真氏恩河仁也、乾隆年間卒向姓恩河里之子親雲上墓 同治11年壬申在番同氏花城親雲上記」と刻まれており、下の方には蓮弁の絵模様が描かれている。墓碑に絵模様を描くのは、死者の極楽往生を願う仏教の思想で、沖縄本島あたりでは、ほかに日輪や唐草模様などがよく用いられている。

この墓碑は旧藩末期に建てられ、現存する墓碑では比較的古く、砂岩で造られています。恩河里之子親雲上の墓碑を建てた花城親雲上は、1872（同治11）年に首里王府から派遣された在番で、1874年に病で亡くなりました。彼の任期中、平良の頭、忠導氏玄安ら54名が犠牲となった「台湾遭害事件」や「ドイツ商船ロベルトソン号宮国村沖遭難事件」が起き、また「琉球国が琉球藩」となりました。これらの事件と墓碑に関わりはありませんが、花城親雲上が宮古島に赴任してきたことの証拠であり、近世末期に起きた事件などを彷彿させる貴重な金石文です。

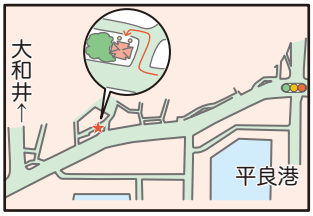


真玉御嶽

平良の海岸端、通称「パスタナカ」広場の南方にあります。『御嶽由来記』には「祭神 男神金殿・女神まつめが」「諸願につき平良４か村崇敬す」と記されています。

真玉御嶽の由来

昔、真玉の地に金殿とまつめがという貧しい夫婦がいました。２人は正直者で神様を大事にしたので、次第に子孫繁昌し、贅沢ができるようになりました。それでもますます良い行いをし、長生きをしたので、人々は夫婦の骨を真玉山に葬り、神として祀りました。この嘉例（縁起）にあやかるため、子孫繁昌の神として崇敬されています。



ぶばかり石（人頭税石）

平良字荷川取の海際に、人の背丈ほどの石柱が立っています。地元では、「ぶばかり石（賦計り石）」と呼んでいて、「島の人はこの石より身長が高くなったら人頭税を課せられた」という古くからの言い伝えも伝わっています。この石柱については、柳田國男著『海南小記』の中でも紹介され、全国に知られるようになりました。

宮古島の近世では、数え 15 才～ 50 才までの男女に税が課され、男は粟、女は布を納めました。それは苛酷な税制で、役人による税の取り立てに、人々は長年苦しめられ続けたといいます。琉球列島には一部の地域に石柱信仰があり、この石は人頭税の史実とは無関係のようです。ただ、この石に託して人頭税による生活の苦しみを語り伝えてきた人々の声に耳を傾けることは、今を生きる私たちに必要なことでしょう。

人頭税の歴史

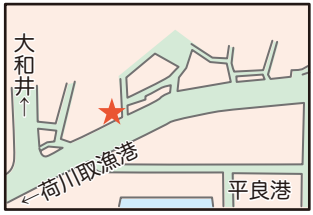
1637年、琉球王府は先島（宮古島・八重山諸島）に人頭税制を施行しました。この税制は頭数（人口）を基準に粟や織物を税として割り当てたもので、役人の見立てにより税を納めさせられました。1659年には、頭数の増減に関係なく一定の税を納める「定額人頭税」制となり、更に、1710年には15才～50才の年齢が基準とされました。

女性が織った御用布は島の税の３分の２を占め、また薩摩上布として大阪で高値で取引されていたため、天候不順で飢饉に見舞われたときでも滞納は許されず、実質的に強制労働に近いものでした。また、税を確実に納める手段として、各村に「五人組」という制度が設けられ、その組の誰かが年貢を納められなかった場合、その組で責任を持たされ、また、五人組が納められない場合は村が、村が納められない場合は島全体でまかなうという、連帯責任のシステムが取られました。

1888（明治21）年の大飢饉を機に人頭税の廃止が訴え始められ、1893（明治26）年、代表団が上京して請願書を国会に提出しました。その請願書には農民の生活が次のように記されています。

『島民はさつま芋を常食とし、大半の島民は粟の味を知らず。味噌を持っている者は全島民の４分の１で他の皆は海水に水を足して芋の葉や蔓、海藻などを煮て食べている。醤油などは口にすることは無い。衣服は夏は芭蕉布１枚、冬は破れた木綿の着物を１枚上に着るのみ。ひどいところは１、２枚の夏着を家族で代わる代わる着ている。建物も丸太の上に草で屋根を葺き、茅を編んで四面を囲っているだけで、大半は土間で、蓆を敷くのは稀である。家も非常に小さく、要するに本州の乞食を彷彿とさせる（一部要約）』

こうした廃止運動が実り、1903年（明治36年）１月１日の新税法施行に伴い、260年余にわたる人頭税は廃止されました。

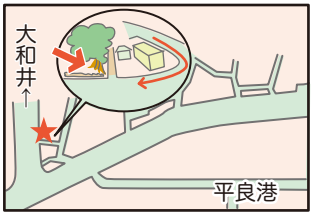


湧川まさりゃ御嶽

この御嶽は、宮古島の竜宮伝説を伝える貴重な御嶽です。

ガジュマルとクロツグ、フクギが生い茂り、昔は古い壺が祀られていましたが、いつのまにかなくなってしまいました。2018（平成 30）年に地主の土地活用によって駐車場の一角に配置されています。

近くに海へ流れ出る水の湧き口があったことが、御嶽の名前の由来であるとも伝わっています。



宮古島の竜宮伝説

昔、荷川取村に湧川まさりゃという漁師がいました。ある日、漁に出てエイを釣ると、そのエイがたちまち美しい女性に変わりました。まさりゃは一目惚れして夫婦の契りを結びますが、女は海へ戻っていってしまいました。

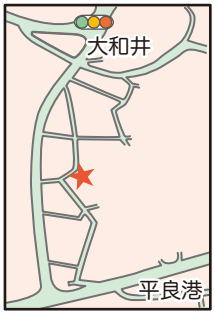
2、3ヶ月たったある日、同じ場所で釣りをしていると、2、3歳の3人の子どもがどこからともなく現れ、「母の使いで父を龍宮に案内するために来ました」と言いました。まさりゃは不審に思いましたが、子どもたちがまさりゃの手を取って海に入ったかと思うと、たちまち金銀ちりばめた楼閣の中にいました。子どもたちの母は以前に契りを結んだ女に間違いなく、親しげな顔でまさりゃを出迎え、三日三晩、酒や料理でもてなしました。別れ際、女は涙を流し、「これをいつまでも私の形見と思って下さい」と瑠璃色の壷を手渡しました。まさりゃは一気に現実に引き戻された気持ちで家に帰ったのですが、龍宮での三日三晩はこの世では3年3ヶ月の月日が過ぎていました。瑠璃壷には神酒が入っており、呑んでも呑んでも酒は尽きることなく口の渇きを癒し、天の甘露のような美味しい酒でした。これを呑んだ者は無病息災で長生きしたため、まさりゃは家宝として秘密にしていましたが、やがて村中の噂となり、大勢の村人が壷を見ようと家に押しかけて来ました。まさりゃはいつの間にか贅沢な生活に思い上がってわがままになっており、「この酒は朝晩とも同じ味で、もう呑み飽きた」と言いました。そのとたん、壷は白鳥と化して空に舞い上がり、東の宮国村のスカプ屋という家の庭木に留まり、姿を消してしまいました。

『御嶽由来記』より

宮国村のスカプヤー御嶽
白鳥がとまったとされる木が祀られている

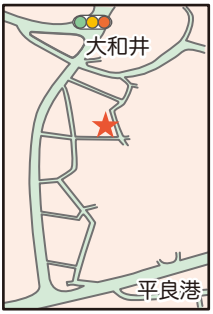
ウプムイ御嶽

荷川取村の御嶽としてヤブ（民間医者）が祀り始めたと伝わっています。境内はコンクリートで舗装され、北側に主神マツカマが祀られています。西側には３ヵ所の祭壇があり、「真玉御嶽」、「ツカサヤー（漲水御嶽）」、下地の「赤名宮」などの神々を遙拝（遠くから参拝）する場所となっています。御嶽の周りにガジュマルやクロツグなどが広く茂っていることから、ウプムイ（大森）と名付けられたようです。



カーニ里御嶽

カーニ里の守護神が祀られています。中央に 30cm ほどのイビ(香炉)と、香炉がわりの切り石が置かれ、これを低い石積みで囲っています。後方にはクロツグ、テリハボク、フクギなどの御嶽林が茂っています。以前は御嶽のサス(神女)を中心に里人揃って祈願行事を行っていましたが、サスのなり手が途絶えたため、現在は各個人で参拝しているようです。御嶽には 20 数 m の細い参道が三方向に設けられ、参道の両脇には苔むした低い石垣が続いています。昔、この地に仲宗根豊見親の側室が住んでおり、御嶽の西の門には門番が立ち、3本の道路は緊急時のピンギンツ(逃走路)だったと伝わっています。



大和井（大和井・ブトゥラ井・大川）

大和井

ブトゥラ井

大川

一般的に降り井は洞窟に石階段を設ける程度で、多くは自然のまま利用されていましたが、大和井は全体にわたって石が積まれています。下部に大きな石を置き、上部へいくにつれ小さな石に変わり、石も自然の石ではなく切り石を円形に積み上げており、その力学的な工法は周辺の風致とともに訪れるものに安定感を抱かせます。『雍正旧記』によれば、1720年頃に掘られたと考えられています。大和井は首里王府

から派遣された役人や頭などごく一部の役人が使用し、庶民には開放されなかったといわれています。また、他には見られないかんぬきの跡があり、水守もいたと伝わっています。

ブトゥラ井は簡素な造りで、一般の住民用として用いられていたものと考えられています。

大川は牛馬専用の井戸で、数多く存在する井泉の中でも牛馬専用のものは珍しく、「雍正旧記」に1717年に補修工事がなされたという記述があることから、18世紀初頭にはすでに存在していたことが伺われます。上水道の普及で使われなくなり、土に埋もれていましたが、2004（平成16）年に、ほぼ完全な状態で掘り出されました。

人々は古くから降り井を中心に集落をつくり、暮らしをたてていた。戦後、水道が普及するまでは、平良の街においても同様だった。

保里御嶽

この御嶽の周辺は、14世紀前期に保里天太が築いた城跡と伝えられています。神域には入り口からフクギ、ガジュマルなどの古木がそびえ立っています。古木の周辺には神域を囲った石積みの跡が残っています。入り口から30mほど入ったところにイビ（香炉）があり、中央には「テダノ主神」、その左右に「水の神」「トビトリノ神」と神様の名前が記されています。

保里天太と２人の息子

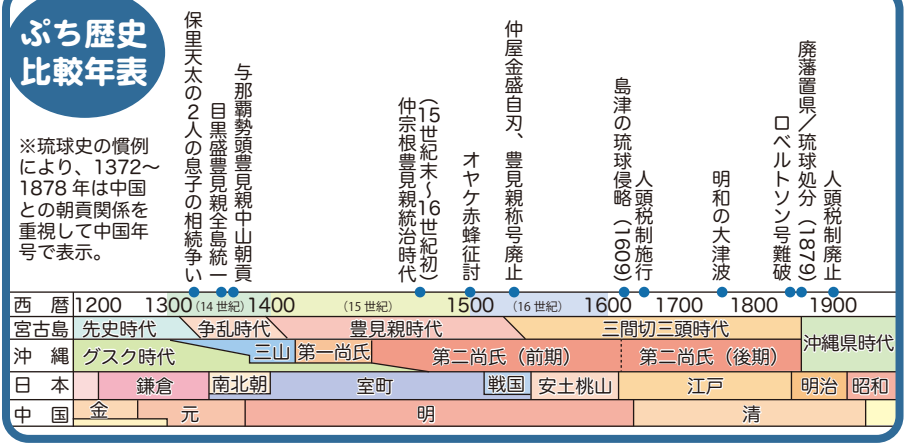
保里天太には保久利屋盛と居士佐加利という２人の息子がいました。兄の保久利屋盛は怠け者で才能がなく、弟の居士佐加利は見目もうるわしく、器量もよく、兵法の達人でした。保里天太は、才能のない兄ではなく弟に家督を継がせようと考えていましたが、兄は弟の臣下になることは末代までの汚名だと、ある日、城下の父老たちを集め、「お前たちの娘らは、ぶとぅら井に水汲みに行く途中で私の弟に強姦されようとしている。父もまた騙されて弟に家督を譲ろうとしている。弟が天太になれば、お前たちも苦労するだろう。今、これを戒めなければ将来必ず悔いを残す」とありもしない話を作り上げて弟を悪く言いました。城下の父老たちはこれを本当だと信じ、保久利屋盛の策略に従って居士佐加利を捕らえようとしました。ところが、居士佐加利は先にこれに気づき、城から逃げ出し、城辺の箕の隅という山里に隠れ住みました。

この相続争いの後、保里天太が毎日嘆き悲しんでいると、ある日、保久利屋盛は「弟が城辺の箕の隅にいると聞いた。早々に弟のところへ行くがよい」と父を追い出してしまいます。保里天太は泣く泣く住みなれた城下を離れますが、城辺に向かう道中につまずいて倒れ、息を引き取ったと伝えられています。

『宮古島記事仕次』より

ぷち歴史比較年表

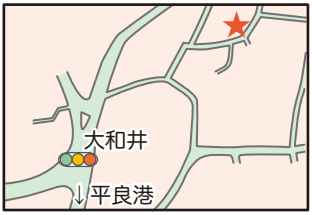
※琉球史の慣例により、1372～1878年は中国との朝貢関係を重視して中国年号で表示。



芋ヌ主御嶽

1594年、砂川親雲上旨屋（長真氏旨屋）は、御物宰領（宮中や官庁に捧げる品物の管理責任者）として琉球王府に出向き、仕事を終えて島に帰る途中、逆風で中国に漂着しました。丁度この年、中国にルソンから芋が伝わり、栽培普及が行われていました。旨屋は３年間中国に滞在し、1597年、芋を持って帰途につきました。ところがまた遭難して九州へ漂着しますが、同年、なんとか宮古島へ帰島しました。芋は台風や旱魃にも強く島の風土に適したので、次第に芋が主食となりました。こうして旨屋はンーヌ主（芋の神様）として御嶽に祀られ、戦後間もない頃まで、毎年８月に初芋を捧げて祝うンープーズという芋の豊作感謝祭が盛大に行われていました。

ちなみに琉球へは1605年に野国総監が中国から芋の苗を導入。後年、琉球の芋が薩摩に伝わって「さつまいも」と呼ばれるようになりました。



琉球王国の身分制度

琉球王国の位階の制度は15世紀末、尚真王の頃に始まり、近世の制度が確立したのは、17世紀、尚貞王の時代です。

身分		称号	品位	地頭職	領地
大名（一間切の領主）	王族（按司部）（儀典関係の閑職）	王子（国王の子 / 王叔 / 王弟）	無品（最高品位）	按司地頭	一間切（現在の市町村相当）
		按司（王子の子 / 按司の跡継ぎ）			
	上級士族（下司）（国政の要職）	親方（政治の実務士族の最高位）	正一品	総地頭	一間切
			従一品		
			正二品	脇地頭	一村
小名級（一村の領主）			従二品		
		親雲上	正三品	脇地頭	一村
			従三品		
			正四品		
			従四品		
士	一般士族（ブンニン）	里之子親雲上（里之子家・中級士族 譜代：古くからの士族の家柄）	正五品	領地なし	
			従五品		
		筑登之親雲上（筑登之家・下級士族 新参：新しく士族になった家柄）	正六品		
			従六品		
			正七品		
			従七品		
		里之子（里主）（里主：総地頭や脇地頭の跡継ぎ）	正八品		
			従八品		
		筑登之（里主）	正九品		
			従九品		
		子（譜代の子弟）	無位		
		仁屋（新参の子弟）			
平民（百姓）		町民、農民、地方役人			

地方役人の位階

- **地頭代**（称号：親雲上）— 間切行政の現地最高責任者（村長相当）
- **夫地頭** — 地頭代の補佐
- **捌理** — 首里大屋子、大掟、北掟、南風掟の４人をいう。地方役人のエリート
- **文子** — 間切の中の下級役人

船立堂

兄「かねどの」と、妹「しらくにやすつかさ」を鍛治神・農業神として祀る御嶽です。毎年旧暦の11月8日には、鍛冶屋などがフイゴ祭りを行っています。

船立堂の由来

昔、久米島の按司に一人娘がいましたが、兄嫁が娘を邪魔に思い、按司を騙して娘を小舟に乗せて追い出してしまいました。これを見かねた兄が小舟に泳ぎ乗り、妹とともに漂流しました。翌朝、宮古島の漲水の浜に漂着し、船立の地に住み始めます。やがて妹は住屋里かねこ世ぬ主と夫婦となり、９人の子を儲けました。そして成人した子どもたちは祖父に会いたいと、母を連れて久米島に戻りました。按司は娘を追い出したことを後悔しており、とてもよくしてくれたうえに、黒金と巻物を持たせて宮古島に帰しました。兄はこれを元に鍛治屋を起こし、農具を作りました。これによって宮古島で農業が発達し、豊かになりました。多くの人の飢えをしのぎ、安楽に暮らせているのはこの兄妹のお陰だとして、二人の骨を船立山に納め、御嶽の神様として崇めました。

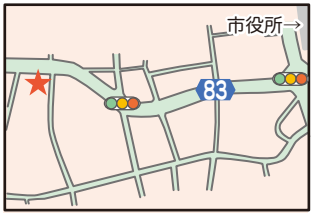
『御嶽由来記』より

ユーラジ御嶽

この御嶽は「ユーラジ（夜占の地＝ユウラの地＝ユウラジ）」御嶽と呼ばれています。『宮古島記事仕次』によれば、吉日を選んで火の神様に焼香をし、「玉城・普門好善」と唱え、そのときに道を行く人の発する言葉の吉凶に従って事の善悪を知る占いがあったとされています。

玉城普門好善の話

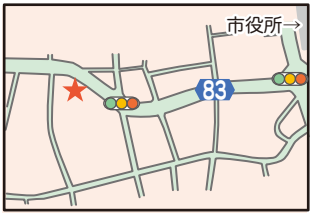
昔、普門好善という美しい娘がおり、玉城という琉球の商人との間に男の子を一人儲けました。仕事で数年間八重山に渡っていた玉城がようやく島に戻り、妻と子の待つ家を覗くと、夜泣きをする子をあやす彼女の姿が見えました。そのとき、泣き止まぬ子にむかって、「流浪人の子が何故夜泣きをするのか」と普門好善が叱りつけたのです。これを聞いた玉城は「私は公用で旅をしているのに、流浪人とは何事か！」と怒り、子どもを奪い取ってそのまま琉球に戻ってしまいました。首里に帰る途中、「この子は成長したら按司となるだろう」と占い師に言われ、そのとおりに息子は出世して按司になりました。



仲屋金盛ミャーカ

　このミャーカは16世紀初頭に宮古の支配者として君臨した仲宗根豊見親の嫡子（家を相続する者）、仲屋金盛豊見親を葬った墳墓です。仲宗根豊見親亡き後、家督を継いだ仲屋金盛は、「野原岳の変」によって自殺してしまいます。この事件を機に、豊見親の称号は廃止され、宮古島における琉球王府の支配体制が強まっていきました。

　『忠導氏仲宗根家系図家譜』には「金盛・不届きに付き家督を継がず」と記されており、本来ならば「仲宗根豊見親の墓」に入る立場でしたが、このような離れたところにひっそりと葬られています。



野原岳の変

むかし、今の友利に金志川金盛と那喜太知という兄弟がいました。二人は、宮古の支配者である仲宗根豊見親が、石垣島や与那国島へ遠征するときに従軍して多くの手柄をたてるなど、知恵と勇気を兼ね備えた兄弟でした。しかし、兄の金盛は、与那国島の遠征の帰りに多良間島で亡くなってしまいました。そこで弟の那喜太知が城辺を治める首長となり、金志川豊見親といわれ、みんなに慕われました。

そんな金志川豊見親の威勢を妬んだ仲宗根豊見親の長男である仲屋金盛豊見親の家臣の中屋勢頭は、仲屋金盛豊見親に、「金志川豊見親は、あなたをないがしろにし、反乱を起こそうとたくらんでおります。」と言い、金志川豊見親へは、「仲屋金盛豊見親は、最近あなたのことを疑っています。」と、嘘をつきました。

だまされた仲屋金盛豊見親は、金志川豊見親を殺してしまおうと、宮古島の中央付近にある野原岳で宴を催し、そこに金志川豊見親を誘いました。一方、金志川豊見親は、自分が争いを起こすつもりがないことを伝えるため、宴へとむかいました。

宴もたけなわになったころ、仲屋金盛豊見親が盃を投げ捨て、「者ども出でよ！」と叫ぶと、隠れていた兵が一斉に現れました。金志川豊見親は、「私に異心がないことは太陽が照る如しである。過って後悔するでないぞ」と言いましたが、聞き入れられず、兵は剣を抜いて金志川豊見親に討ちかかりました。すると、金志川豊見親は異心がないことを証明するために、崖から身を投げてしまいました。

その後、この事件を調べるために琉球王府から糾問使が来ることになりました。それを知った仲屋金盛豊見親は、自分の過ちを後悔し、自分をだました中屋勢頭を斬り殺した後に、自殺してしまいました。

外間御嶽

『雍正旧記』には外間御嶽の祭神は「男神・根間大按司根間角嘉波良」とされ、根間大按司の子孫の根間つのかわら、目黒盛、真角与那盤、普佐盛の、５代の墓であると記しています。

根間角嘉波良は 14 世紀後半に宮古島を統一した目黒盛豊見親の父で、根間大按司は祖父にあたります。この墓を普佐盛の弟、根間いかりが御嶽の形に造り変え、龍宮界から伝授された「コネイリ祭」を始めたことから、以後、御嶽として人々から崇敬されるようになったと伝えられています。

コネイリ祭

『雍正旧記』より

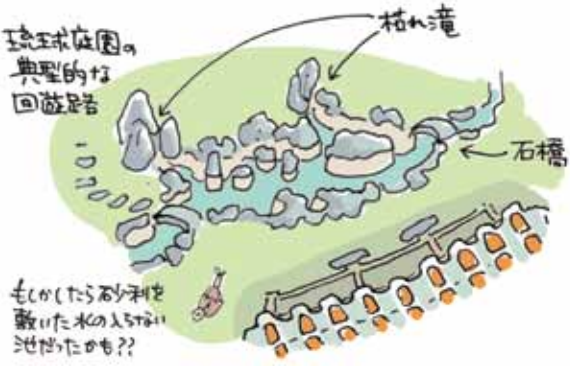
真角与那盤の次男、根間いかりはとても親孝行者でした。ある日、美しい女が海から現れ、「あなたの孝行の志は龍宮界まで聞こえている。私は孝行の祭りを伝授させるため龍宮界から遣わされた」と、根間いかりを海の中の宮殿へ連れて行き、もてなした後、「このコネイリ祭は13年に１度、９月に先祖の墓所で祭りを行えば、島は豊かになり子孫繁栄するので怠けず祭を行うように」と伝授しました。以後、そのように祭りが執り行われるようになりました。

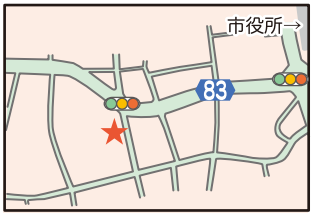
旧仲宗根氏庭園

仲宗根豊見親を元祖とする忠導氏は、古琉球から近代まで、与那覇勢頭豊見親を元祖とする白川氏とともに宮古島を二分する勢力を誇った旧家です。仲宗根豊見親は、14世紀後半に宮古島を統一した目黒盛の５世孫にあたります。

この庭園は、左右に細長い池泉鑑賞式庭園で、正面の池と建物との間に芝を敷き、奥には山を設けています。池には枯滝を２ヵ所配置し、周りは漆喰で固めてあります。

左から水を引き入れ、手前の小さな橋から山をぐるりと回り、右の石橋を渡るといった、琉球庭園の典型的な回遊路の手法をなしており、３つの立石は中心の石より右の石の方が高く、これも、琉球独自の石組みです。



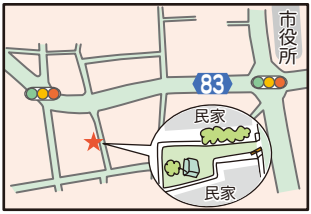


仲屋まぶなり御嶽

多良間島に伝わる
真保那璃の枕石

写真：多良間村教育委員会

この御嶽は仲屋金盛豊見親の一人娘まぶなりを祀った御嶽です。まぶなりの父仲屋金盛は、家臣の讒言を信じて城辺友利の金志川那喜多津豊見親を殺し、王府からその罪を問われて自害しました。その娘まぶなりは、父の罪を背負い、王府に召し使われ、中山王の寵愛を受けて妊娠しますが、周囲の宮女たちに激しく嫉妬されます。その嫉妬に堪えかね、宮古島に帰る途中、船頭に乱暴されて海に投げ出され、多良間島の浜に漂着し、息を引き取りました。しばらくして浜を通りかかった、やらぶたてよのしという男がまぶなりの亡骸を見つけ、人々を集めて「ふたつ瀬」というところに丁寧に葬ったといわれています。



尻間御嶽

宮古島市役所に隣接する住屋遺跡の東側にあり、『雍正旧記』には「男神・ちゃくむ金大世主豊見親を祀る」と記されています。

尻間御嶽の由来

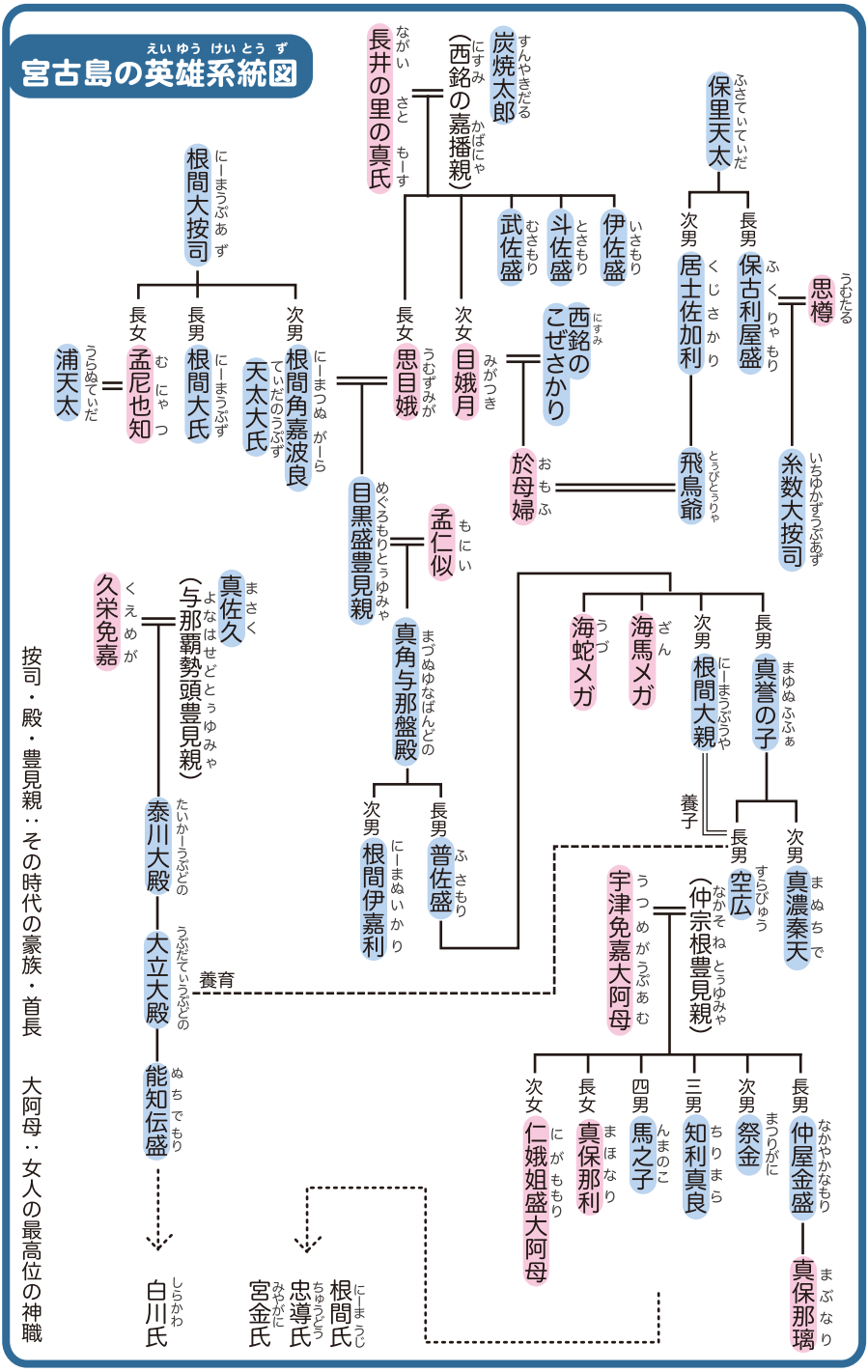
昔、下里村の住屋に住んでいた「こいとの」は、子どもが欲しくて、日夜神仏にお祈りをしていました。そのかいあって、間もなく女の子が産まれ、「まんなふ」と名づけてかわいがりました。まんなふが７才の時、母が死に、こいとのは後妻をむかえます。ところが、この後妻は大変心根が悪く、ある日まんなふを誘い出し、尻間山のあぶ（洞穴）に投げ入れてしまいます。あぶの中の葛に引っかかって７日７晩泣き叫んでいると、天神が天から降りてきて、まんなふを抱いて昇天し、再びまんなふを連れて下界に降り、「親類と仲違いをし、先祖を敬うことを怠る者は神剣を以て罰する」と戒め、再び昇天しました。こうして人々はまんなふを神司として立て、神事を行うようになり、尻間山には「天神が降りたところ」として御嶽を建て、祀るようになりました。

住屋遺跡

※住屋遺跡における事例
諸説あり。屋根もイメージです。

住屋遺跡は、14～17世紀初期頃の集落遺跡とされています。1982（昭和57）年の２度にわたる発掘調査の結果、推定14～15世紀前半頃の竪穴住居址１基と、推定15世紀後半～17世紀前半の平地住居址、石敷住居址「円形状建物跡」、竪穴炉址、溜井戸などの遺構や、土器、鉄製品など様々な遺物が検出されました。同じ遺跡で竪穴ー平地ー石敷住居址と、年代が違う遺構などが検出されるのは稀であり、当時の人々の生活様式や住居形態の変遷を知る上で重要な遺跡です。また、ここは1629年に在番仮屋が設けられた場所でもあり、廃藩置県直後には警視派出所が設置、その後、宮古島役所の開設にともなって役所長官舎、支庁長官舎、宮古民政府知事公舎、宮古群島知事公舎、琉球政府宮古支庁長公舎として重用され、近代までの諸制度の変遷を知る上でも重要です。

宮古島の英雄系統図



按司・殿・豊見親…その時代の豪族・首長　大阿母…女人の最高位の神職

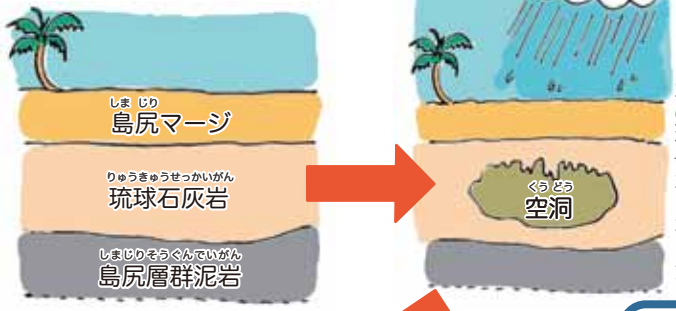
盛加ガー（洞井）

盛加ガーは、平良近郊に散在する降り井（洞井）の中ではもっとも規模が大きく、直径約24mの開口部から103段の石段を降りた奥深いところに水の湧き出る口があり、石段には女性や子どもたちが踏みしめた跡が残っています。

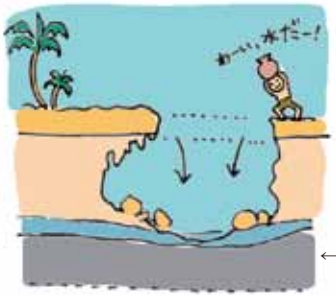
水道の発達しなかった頃、人々の生活用水は天水と各所に散在する降り井でした。集落は降り井を中心に形成、発達してきており、宮古島の歴史は降り井を切りはなして考えることはできません。盛加ガーの内部は小規模ながら貝塚層もあり、周辺一帯からは多くの青磁片、土器片などが表面から採取でき、大きな集落があったことを物語っています。郷土史家の稲村賢敷氏は、14世紀後半に勢力をふるった与那覇原一党の本拠地がこの一帯にあったとしていますが、定かではありません。

「降り井」はどうやってできたの？

宮古島の地質

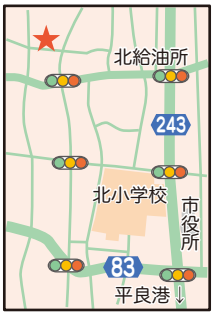


水に溶けやすい琉球石灰岩が雨水などで浸食され、地中に空洞ができる

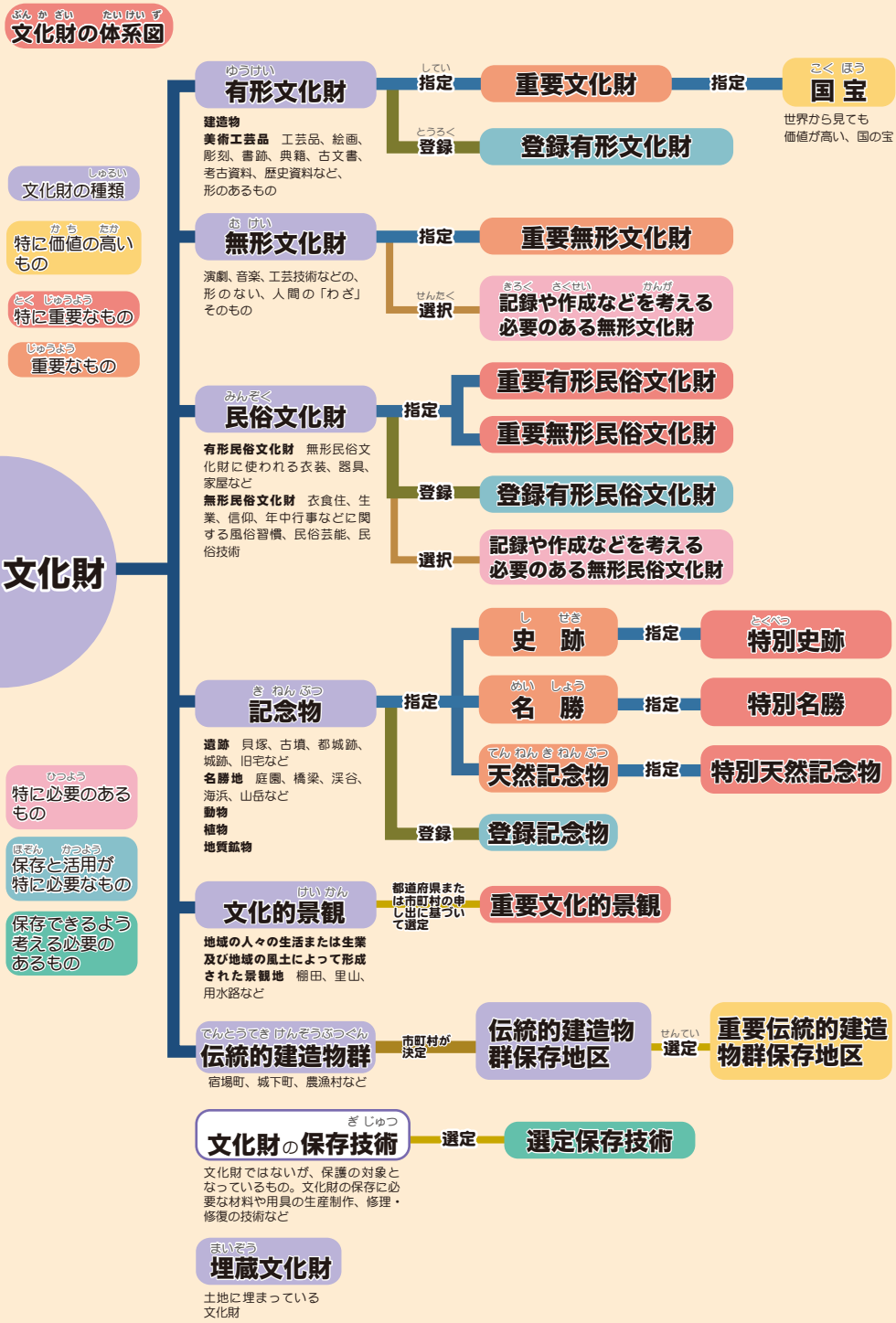


浸食が進み、やがて地表が崩れ、陥没ドリーネという窪地ができる

←この層はほとんど水を通さないので、ろ過された水がたまる



文化財の体系図


文化財の種類
特に価値の高いもの
特に重要なもの
重要なもの
特に必要のあるもの
保存と活用が特に必要なもの
保存できるよう考える必要のあるもの
文化財
有形文化財
建造物
美術工芸品　工芸品、絵画、彫刻、書跡、典籍、古文書、考古資料、歴史資料など、形のあるもの
指定
重要文化財
指定
国宝
世界から見ても価値が高い、国の宝
登録
登録有形文化財
無形文化財
演劇、音楽、工芸技術などの、形のない、人間の「わざ」そのもの
指定
重要無形文化財
選択
記録や作成などを考える必要のある無形文化財
民俗文化財
有形民俗文化財　無形民俗文化財に使われる衣装、器具、家屋など
無形民俗文化財　衣食住、生業、信仰、年中行事などに関する風俗習慣、民俗芸能、民俗技術
指定
重要有形民俗文化財
重要無形民俗文化財
登録
登録有形民俗文化財
選択
記録や作成などを考える必要のある無形民俗文化財
記念物
遺跡　貝塚、古墳、都城跡、城跡、旧宅など
名勝地　庭園、橋梁、渓谷、海浜、山岳など
動物
植物
地質鉱物
指定
史跡
指定
特別史跡
名勝
指定
特別名勝
天然記念物
指定
特別天然記念物
登録
登録記念物
文化的景観
地域の人々の生活または生業及び地域の風土によって形成された景観地　棚田、里山、用水路など
都道府県または市町村の申し出に基づいて選定
重要文化的景観
伝統的建造物群
宿場町、城下町、農漁村など
市町村が決定
伝統的建造物群保存地区
選定
重要伝統的建造物群保存地区
文化財の保存技術
文化財ではないが、保護の対象となっているもの。文化財の保存に必要な材料や用具の生産制作、修理・修復の技術など
選定
選定保存技術
埋蔵文化財
土地に埋まっている文化財

それぞれの文化財の一例

※宮古島市や、沖縄県、九州にある文化財の一例

文化財

有形文化財
形のあるもの

- 指定 → 重要文化財
  -
  - 豊見親墓（3基）
- 指定 → 国宝
  -
  - 治金丸 / 沖縄県
- 登録 → 登録有形文化財
  -
  - 旧西中共同製糖場煙突

無形文化財
形のないもの

- 指定 → 重要無形文化財
  -
  - 宮古上布
- 指定 → 重要有形民俗文化財
  -
  - ウイピャームトゥの祭場

民俗文化財
生活に関係したもの

- 指定 → 重要無形民俗文化財
  -
  - 宮古島のパーントゥ
- 登録 → 登録有形民俗文化財
  -
  - 竹富島の生活用具 842 点 / 沖縄県・竹富島

記念物

- 指定 → 史跡（歴史上の名所）
  -
  - 遠見番所
- 指定 → 特別史跡
  -
  - 吉野ヶ里遺跡 / 佐賀県
- 登録 → 登録記念物
  -
  - 旧仲宗根氏庭園

文化的景観
人間と自然が作ってきた景色

- 指定 → 重要文化的景観
  -
  - 別府の湯けむり・温泉地 / 大分県・おおいたけん

伝統的建造物群
歴史的なまちなみや景色

- 伝統的建造物群保存地区（指定）→ 重要伝統的建造物群保存地区
  -
  - 竹富島の農村集落 / 沖縄県 竹富島

名勝

-
  - 東平安名崎

特別名勝
景色のよいところ

-
  - 識名園 / 沖縄県

天然記念物

-
  - オカヤドカリ

特別天然記念物
貴重な自然を記念するもの

-
  - イリオモテヤマネコ

選定保存技術
文化財の保存に大事な技術

-
  - 苧麻糸手績み

埋蔵文化財
埋まっているもの

-
  - 住屋遺跡

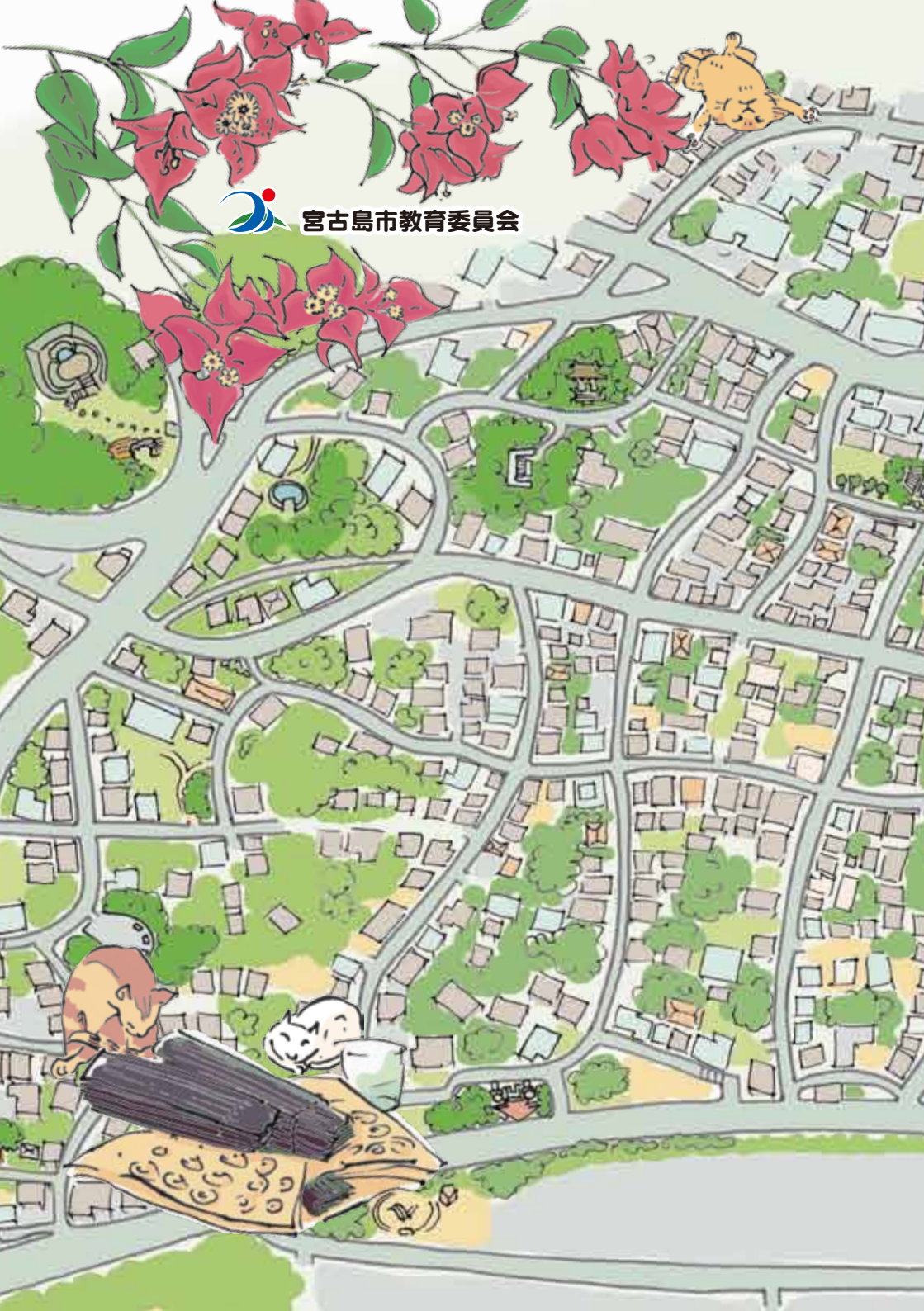
私たちの文化財です
大切にしましょう

文化財を許可なく無断で現状変更することは法律で禁止されています。

宮古島市 neo 歴史文化ロード　**綾道（平良北コース）**

発行　改版 平成 30 年８月
編集・発行　宮古島市教育委員会
〒906-0103 沖縄県宮古島市城辺字福里 600 番地 1
TEL 0980-77-4947　FAX 0980-77-4957
イラスト・デザイン　山田　光

平成 25 年度宮古島市 neo 歴史文化ロード整備事業


宮古島市教育委員会